

幸福の木

川崎ゆきお

「夜中に？」

「はい」

「夜中に鉢植えを持って歩いていたと？」

「そうです。夜中は言い過ぎですが、冬場は日が暮れるのが早くて、夜が長いので、そう言っただけで、実際はまだテレビのゴールデンタイム時間帯でしたかねえ。それが終わって、いつものように散歩コースを歩いていました。これは真冬でも健康のため、歩いています」

「その話はいいから、鉢植えの話を」

「主婦でしょうかねえ、中年の。近所の人だと思います。その人が鉢植えを持って急ぎ足で横切ったのです」

「ほう」

「私は大きい方の道で、その人は細い方の道から出て来て、鉢合わせになったのですが」

「あなたも鉢植えを」

「いえいえ」

「ばったり出合ったことを鉢合わせと言うでしょ。鉢と鉢を合わせたのではないかと」

「そんなこと誰がします」

「冗談です。続けてください」

「ぶつかるにはまだ距離が充分ある。しかし、そのままお互いに進めば確実にぶつかります。そこで私は道を譲りました。その女性の方が急いでいるようなのでね」

「はい」

「鉢植えを持って急ぎ足、これは急に止まると危ないでしょ」

「そうなんですか」

「だと思います。まあ、急いでいる方に道を譲る。それだけのことですが」

「どんな鉢植えでした」

「その女性が両手で抱えた状態で、頭から少し枝が出ている程度の高さです」

「じゃ、結構大きいですなあ」

「重いと思いますよ」

「どんな植物です」

「クルミだと思います。夜中に鉢植えを持ってウロウロするとすれば、これはクルミに決まっています」

「胡桃」

「そうです。クルミの鉢植えです。ああ、やってるやってる思いましたねえ」

「え、何をやっているのだと。まさか鉢植え泥棒」

「近所の人だと思いますよ。そんなことはなさらないと思います。そうではなく……」

「じゃ、何ですか」

「クルミのリップちゃんです」

「ああああ」

「幸福の木です」

「何と」

「きっとその女性、主婦でしょうが、そのおうちにクルミの鉢植えが来たのでしょうかねえ。それで急いで他の家に持って行く最中かと」

「何ですか、それは」

「幸福の手紙と同じですよ」

「そんなのが流行っているのですか」

「らしいです。クルミのリップちゃんは、まあ、人面草のようなものです。実際には実ですがね。つぼみの状態は赤ちゃです。その頃が一番かわいいとか」

「それが幸せの木なら、人に渡す理由が」

「それはルールです。幸せを長く持つと不幸になるらしいのです。それで、その主婦の庭先か玄関先に持ち込まれたクルミの鉢植えを、急いで何処かの家へ運んでいてところだったのでしょうか。捨てやすい場所、近すぎてもいけないし、遠すぎても重いので……」

「その現場をあなたは見られたわけですか」

「はい、そうなんです、ただの鉢植えかもしれません」

「きっとそうでしょ。鉢植えをもらって、帰るところかもしれんからねえ」

「そうですねえ」

了